

平成 31 年 度

特進入学試験・一般入学試験

国 語

時間：50分
満点：100点

受験についての注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
- 2 問題用紙は11ページ、問題は一～三まであります。
- 3 開始の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
- 4 試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。
- 5 各問題とも、解答は解答用紙(別紙)の所定欄に記入してください。
- 6 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。
- 7 解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二〇世紀後半におけるテクノロジーの発達は、今から八十年ほど前にチェコスロヴァキアの作家カレル・チャペックが夢見た「人間の仕事をする機械」としてのロボットを、現実の存在とすることを可能ならしめた。それも、一般の人々のあいだで漠然とイメージされている金属の皮膚で覆われた人間というヒューマノイド型ロボットばかりでなく、人間のかたちとは似ても似つかないさまざまな産業用ロボットも登場してきた。その活躍の範囲も、大規模な工場生産の過程の一部を受け持つことから、老人や病人の世話を引き受ける介護ロボットや、ロボット・コンテストの例に見られるようなエンターテインメント系ロボットに至るまで、きわめて幅広い分野にわたっている。人間の生活にかかわるロボットの役割は、今後さらに大きくなって行くであろう。

それにもなつて、ロボットと人間の関係をどのように考えるかという問題が浮上してきた。より一般的に、機械と人間の関係と云つてもよい。ロボットはテクノロジー文明の成果をクシして生み出されたものであり、そのかぎりでは他の近代文明の所産と同じように国境を越えた普遍的存在であるが、そのロボットの利用の仕方、もつと端的に言つてロボットとの付き合い方は、国により、民族によって必ずしも一様ではない。そこには、それぞれの国の歴史的、文化的条件に由来する差異が見られるからである。

私がこの問題を鮮明に印象づけられたのは、一九七〇年代、イタリアにおける「テクノロジーと文化」を主題とするある国際シンポジウムに参加したときのことであった。当時は工場生産へのロボットの導入が盛んに行なわれるようになって来た時期で、日本はその点に関して特に熱心で、実績もあげていた。シンポジウムの席上、イタリア側の参加者から、ロボットの導入をサマタげる大きな要因の一つとして、労働者たちの心理的抵抗があるが、日本はこの問題にどのように対処しているかという設問が発せられた。この質問は、日本側の参加者を当惑させるのに充分であった。ロボットの登場によって自分たちの職場が奪われるかもしれないという不安なら理解できる。それは一般の労働問題と同じであつて、労働者たちが仕事を失わないように対策を講じればよい。A イタリア人たちの言う「心理的抵抗」というのは、機械が人間の代わりをすることへの嫌悪感、あるいは人間の領域が機械に侵されることに対する反発の感情で、そのためにイタリアの労働者は容易にロボットを受け入れようとはしないというのである。

イタリア側のこの質問に対して日本人参加者が当惑したのは、日本ではそのような「心理的抵抗」はまったくなかったからである。日本の労働者たちは、ロボットを何の抵抗もなく受け入れたばかりでなく、ロボットに「花子」とか「百恵ちゃん」などと名前をつけて親しみ、リボンの飾りをつけたりした。「百恵ちゃん」というのは、当時人気の高かった歌手の名前である。そして機械の調子が悪いときには「今日は百恵ちゃんに機械が悪い」などと言いつつ合っていた。つまり日本ではロボットは、当初から、人間と同じような仕事仲間として受け入れ

られてきたのである。

このことは、日本人が昔から、動物や植物はもちろん、生命のない日常の道具類も、人間と同じような心を持った「有情の存在」と考えてきた心性と無縁ではないであろう。

このような日本人のメンタリテイの例の一つとして、現在でも日本の各地で広く行なわれている「針供養」を挙げることができる。これは裁縫の縫針に対して、平素の働きに感謝し、その労をねぎらうため、丁寧に紙に包んで休ませたり、不用になったものを豆腐やこんにゃくのような柔らかいものに刺して、神社にオサめる年中行事の一つである。また、使い古してもはや役に立たなくなった筆をきちんと墓に埋めて供養する「筆塚」も、全国の神社や寺によく見られる。日本人にとって、縫針や筆はただの生命のない道具ではなく、心を通わせることのできる仲間であって、B、不用になった場合も、そのまま捨ててしまわず、人間に対するのと同じように、しかるべきやり方で弔うという風習が現在に至るまで続いている。

フランス語では、「静物」のことを「死んだ自然 (nature morte)」というが、日本人の伝統的な自然観では、自然のなかの森羅万象はすべて生命を持った存在であり、裁縫道具や筆記用具のように日常よく使う道具は、同時に心の友であり、仕事仲間でもある。このことは、最新テクノロジーによる道具であるロボットの場合も、例外ではない。

一六世紀中頃の《百鬼夜行絵巻》のなかに、唐傘、琴、着物その他、日常生活でよく用いられる事物がまるで生き物のようにぞろぞろと行列して歩いて行く様子が描かれている。^{注1}衣桁にかけられた袴が行列に加わりうと身もだえしながら落ちる姿や、本来部屋のなかに鎮座しているはずの琴に足が生えてうごめいている様子は、いささか不気味であると同時に、どこかユーモラスな趣きもあって、画家の遊び心を感じさせる。この異様な行列情景を描かせたものは、これらの事物もまた意志や感情を持った生きた存在だという思想である。江戸時代にはこの他にも、豆腐が人間になった「豆腐小僧」のような奇妙な化け物がいる登場してくるが、西欧の絵画の歴史のなかには、このような例はまず思い浮かばない。創造主である神によって創り出された世界においては、人間とその他の被創造物とははっきりと区別されており、「死んだ自然」はあくまでも死んだままなのである。

高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』より

注1 衣桁 … 室内で衣類などをかけておく道具。

問一 二重線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みをつけなさい。

問二 空欄部 A・B に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A だから B ただし

イ A だが B したがって

ウ A しかし B なぜなら

エ A たとえば B また

問三 傍線部①「そこには、それぞれの国の歴史的、文化的条件に由来する差異が見られる」とあるが、その意味内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国や民族によるロボットとの付き合い方の差は、それぞれの歴史や文化における、機械の占める割合の程度で決まる、ということ。

イ 人間とロボットの関係が国や民族により異なるのは、それぞれの国や民族の歴史や文化が異なる以上、当然である、ということ。

ウ ロボットとの付き合い方が国や民族によって一様でないことは、国や民族の歴史や文化の成立条件を見ればわかる、ということ。

エ ロボットとどのように付き合うかは、その国や民族の歴史や文化がどのようなものであるかによって違っている、ということ。

問四 傍線部②「日本はその点に関して特に熱心で、実績もあげていた」とあるが、なぜか。次の文の空欄を埋める形で本文中から三十五字以内で抜き出し、その初めと終わりの各五字を答えなさい。

から。

問五 傍線部③「日本人が昔から、動物や植物はもちろん、生命のない日常の道具類も、人間と同じような心を持った『有情の存在』と考えてきた」とあるが、これとは対照的な西欧の考え方はどのようなものか。「生命のない日常の道具類」という表現を必ず入れ、本文中の語句を用いて五十五字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「このことは、最新テクノロジーによる道具であるロボットの 경우도、例外ではない」とあるが、その意味内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人は、日常使う道具を心の友であり仕事仲間でもあると考えるため、工場の労働者たちは、ロボットに対しても同じように、

親しみを持って接した、ということ。

イ 日本人の伝統的な自然観では、森羅万象は生命を持つ存在であるため、日本人は、工場生産へ導入されたロボットに対しても、一般の労働問題と同じ問題を抱えた、ということ。

ウ 日本人は、伝統的な自然観に従って、生命のない道具も人間と同じような心を持った存在と考えるので、工場生産へ導入されたロボットも、人間の子どものように大切に扱う、ということ。

エ 日本人は、昔からあらゆるものに生命や心があると考えてきたので、最新テクノロジーが生み出したロボットも自然の一部だと考えて、工場生産への導入を歓迎した、ということ。

問七 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 江戸時代の《百鬼夜行絵巻》には、事物が「有情の存在」であるという、日本人のロボットとの付き合い方に通じる思想が見られ、それは、ヨーロッパの絵画の歴史にも見受けられるものである。

イ 日本で問題のなかったロボットの工場生産への導入に、イタリア人が心理的抵抗を示したのは、「針供養」や「筆塚」に見られる日本人のメンタリテイとは異なった文化・歴史が、その背景にあるためである。

ウ この世界は神の創造物であり、ここでは人間とその他の被創造物は明確に区別されるとする思想は、今後テクノロジーがさらに発達してロボットが生活の中で果たす役割が大きくなっても、変わることはない。

エ 人間の生活に関わるロボットの役割は今後も大きくなると思われるが、ロボットとの付き合い方に関する問題の解決が国によって異なっていれば、一般の労働問題と変わらない問題も増え続けることになる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(これまでのあらすじ) 因島^{いんしま}で暮らす中学三年生の千波^{ちなみ}は、進路が決められず悩んでいた。仲のよい同級生の恵^{めぐ}とは、ともに、同じ因島出身のボルノグラフィティの歌が好きであるなど、いろいろ共通点も多く、話が合う。ただ、恵の父は病気で長く入院しており、母は看護師の仕事で忙しく、暮らしに余裕はない。ある日、学校の帰りに、恵は千波を家に誘った。

恵の家をたずねるのは、ひさしぶりだった。

「チョコ、元気イー」

庭先につながれた飼い犬のチョコが、ふさふさのしっぽをメトロノームみたいにあふつてむかえてくれた。うしろの土が、まるくはいたようにきれいになった。

「おじゃまします」

はいつてもい^アわれないうちから、千波は居間にあがりこんだ。恵の家は、なんだかなつかしいにおいがした。郵便局と名のはいった貯金箱だの、めくられないままの日めくりだの、ごちゃごちゃと物があふれているのも、逆に落ち着^Aく。ギョウギ^Aが悪いとは知りつつ、千波は好奇心い^{注1}っぱいであたりを見まわした。部屋の隅のソファの上に、派手な色あいのブラウスやスカートが乱雑にぬぎ散らされていた。なるほど、のぶ子^{注1}の趣味とはだいぶちがう。でも恵のお母さんだったら似あうと思うけどなあ。

「おばちゃんは？」

「えーと、今日は準夜勤だ。夜中に帰ってくる」

台所でごそごそしている恵が、カレンダーに目をやりながら答えた。

「あいよ」

さほどまたないうちに、テーブルの上におにぎりが置かれた。中からおかかと梅干がのぞいている。

「すごい、恵。自分でつくったん？」

「ほかにだれかいますか？」

千波はつまみ食^Bいセンモン^Bの自分がはずかしくなった。

「いっただきまあす」

塩のきいているところ、そうでないところと多少ムラがあったけれど、手にぎったおにぎりはコンビニのおにぎりと同じであたたくくて、ふんわりお米が立っていた。口にいれるとほわりとくずれる。

「うまい！」

口いっぱいにはおぼる千波に恵は、

「いっぱいお食べ」

と満足そうにうなずいた。

「千波、もう進路決めた？」

唐突にたずねられた。恵の質問はいつも唐突だ。

「うーん、まだ」

千波の答えを期待するというよりは、自分にいたいことがある様子の恵は、

「うちね。……きゃー、どうしよう。いおうかな、やっぱやめようかな」

一応もつたいぶったあげく、だれにもいわんでよと、念をおしながら語りはじめた。

「お父さんの病室のまえに、リハビリの部屋があるんじゃないけど、その理学療法士の先生がめっちゃええひとでね、患者さんの話をいつも嫌がらんと、よう聞いてあげるし、めっちゃやさしいんよ」

② いつもより早口の恵に、なんだかイヤな予感がした。おにぎりから顔をあげると、恵のほおは、さくら色にソまっていた。目は千波をとおりこして、どこか遠いところをさまよっている。

「このあいだ廊下ですれちごうたら、『お父さん孝行ですね』って声かけられたんよ。めっちゃうれしかった」

恵はひとりであって、ひとりで照れて、バシバシテーブルをたたいた。

——なに、恵。ひよつとして、恋をしてるとか？

恵のテンションの高さについていけない千波の心臓の鼓動が速くなった。どくどくと耳の中でまでひびく。

「藤田先生、その先生、藤田先生ゆうんじゃけど、お父ちゃんによると、まだ若いのにめっちゃめっちゃ仕事熱心で、その熱心さにほだされた患者さんが、藤田先生をよろこばせたい一心でリハビリをがんばるんじゃない。その結果、『もうどうなってもええ』ゆうてあきらめとった患者さんまで、よくなつて退院していくんじゃない。これって、スゴイ思わん？」

恵の話の中身よりも、千波は自分の心に起こった変化にとまどっていた。ぞわぞわぞわぞわ。胸が不快にさわぎ立てる。これって、

ひよつとして嫉妬？

「じゃけえ、うちもいつかは藤田先生みたいに理学療法士になって、ひとをはげましたいんよ。いまはまだ自分のことで精一杯じゃけど」
③ 恵の瞳はいつもの数倍かがやきを増していた。見ているのがつらくて、千波は口のあたりに視線をそらせた。

「じゃけど……」

なにか④ なことをいってやりたい衝動がおさえきれなかった。とうとう口をひらいた。

「医系ってすごいお金がかかるが」

「そうなんよ。問題はそれよ。じゃけど、うちはゼツタイにあきらめんけえね。いつかゼツタイ夢をかなえる！」
きりりと表情を引きしめた恵は、高らかに千波にむかって宣言した。

「ああ、やっといえたあ。これで安心。だれかに宣言しとくと、夢は夢でのうなるゆうもんね」

恵は水からあがったようなさっぱりした表情を見せた。さっぱりしないのは千波だ。

——うちはどうなるん？ 置いてきぼり？

心でつながっているとついこんでいた恵の心がはなれていこうとしているさびしさが胸をさす。

「どしたん、千波。ポケットとして」

魂のぬけたようになっていた千波にようやく気づくと、恵は腕をのばしてテーブルごしに千波のおでこを突つづいた。千波の頭は、まるで張子の虎のように、こくこくゆれた。

「もう、こんなところにご飯つぶまでつけて」

しよのない子ですねえといたげに、恵はほつぺたのご飯つぶをつまんで、あいたままの千波の口に放りこんだ。その大人っぽいさが、よけいに千波の心を逆なでした。もう、やめてよ。

「ポルノもがんばるとんじゃけえ、うちらもがんばらにゃ！」

立ちあがった恵は、きびきびとCDをいれかえた。そんな恵がまぶしくて、みじめに口を動かしながら千波はテーブルに視線を落とした。恵をすごく遠くに感じた。

そのとき庭先からおかしな音が聞こえた。

プッ、プッピッピ

連続してひびく。

「……なんの音？」

顔をあげた。

「チョコのおなら。あいつ、よう、おならするんよ」

「え、チョコってメスじゃろ。サイテー」

無理に笑ってみせたけれど、笑顔が引きつった。だれに対しても、いまはいじわるな言葉しかでてこない。「恵、すごい！ がんばって」
そういえない自分がなさけなかった。

八束澄子『明日につづくリズム』一部略より

注1 のぶ子 …… 千波の母。

問一 二重線部AとEのカタカナは漢字に直し、漢字には読みをつけなさい。

問二 波線部アとエのうち、活用形の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「……きゃー、どうしよう。いおうかな、やっぱやめようかな」とあるが、恵が迷いながらも結局言うことにした理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今考えている自分の進路はまだ夢にすぎないが、夢を話すことで千波が実現に協力してくれることを期待したから。

イ 自分の進路についての夢をここで千波に話せば、自分が病院の先生に恋をしていることも同時に伝えられるから。

ウ 今考えていることは実現不可能な夢でしかないことはわかっているが、理学療法士へのあこがれが抑え切れなかったから。

エ 今はあくまでも夢にすぎないが、夢は誰かに宣言しておくと言われないと夢でなくなると言われていることが、頭にあったから。

問四 傍線部②「いつもより早口の恵に、なんだかイヤな予感がした」とあるが、このときの千波の様子として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 進路は二人で相談して決めるつもりだったのに、恵が自分一人で決めていたことで、恵から見下されているような気がした。

イ 進路について千波はまだ決められないのに、恵は何か考えていそうであることから、恵との間に距離ができた可能性に気づいた。

ウ 進路についての夢を夢中で語り始めた恵を見て、恵の心の中では千波の存在などもうどうでもよくなっているのではと感じた。
エ 恵が進路について夢をふくらませていることがわかり、千波はずっとライバルだった恵に後れをとってしまったと思った。

問五 傍線部③「恵の瞳はいつもの数倍かがやきを増していた。見ているのがつらくて、千波は口のあたりに視線をそらせた」とあるが、このように対照的な二人の心情が、動作として表現されている連続した二文を、これより後の部分から探し、その初めと終わりの各五字を答えなさい。

問六 空欄部④に入る語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 直接的 イ 具体的 ウ 建設的 エ 否定的

問七 傍線部⑤「さっぱりしないのは千波だ」とあるが、「さっぱりしない」のはなぜか。このときの千波の気持ちを中心に、六十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「だれに対しても、いまはいじわるな言葉しかでてこない」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何でも一緒にやってきた恵が自分の知らないうちに将来の夢を持ち、夢の実現に向かって前向きになっていることから、自分が見放されているような気持ちになり、何も信じることができなくなるほどいじけてしまったから。

イ どんなどきも心でつながっていると信じてきた恵が、一人で進路について考えていたのを知って感心はしたものの、恵にその夢が実現できるとは思えず、考え直させるためにはどんなひどい言葉でも言うしかないと思ったから。

ウ 自分の将来に明確な希望を持ち、夢を絶対にあきらめないと言い切る恵を見てみると、自分がはじめに感じられるが、どうすればよいかかわからず、他人を悪く言うことでしか自分を守れないほど、心に余裕がなくなっているから。

エ 自分は将来の夢を持ちながらもその実現に踏み切れないのに、恵は夢の実現の道筋など見えないのに夢を絶対あきらめないと宣言できるのを見て、自分がふがいないと感じられ、何かに八つ当たりせずにはいられなくなったから。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

注1 白河院の御時、注2 九重の塔の金物を、牛の皮にて作れりといふこと、世に聞えて、修理したる人、注3 定綱朝臣、ことにあふべき由、聞えたり。

処罰されるらしいという話が広まった

仏師なにがしといふもの召して、「たしかに、まこと、そらごとを見て、ありのままに奏せよ」と仰せられければ、承りて、上りけるを、

なからのほどより、帰り下りて、涙を流して、色を失ひて、「身のあればこそ、君にも仕へ奉れ。肝心失せて、黑白見分くべき心地も侍ら

半分ほどのところから

顔色も失って

我が身が無事であつてこそ

ず」といひもやらず、わななきけり。君、聞こしめして、笑はせ給ひて、ことなる沙汰なくて、やみにけり。

言い終えることもなく

がたがた震えていた

これといった処罰もなく

そのまま終わってしまった

注4 韋中將が、凌雲台上りけむ心地も、かくやありけむとおぼゆ。

時人、いみじきをこのためにいひけるを、顕隆卿聞きて、「こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、

その時、人々はとても愚かな話だと

冥加が

処罰のことを知って

みづから、をこのものとなれる、やんごとなき思ひはかりなり」とぞほめられける。

自分から

みことな気の配り方である

まことに久しく君に仕へ奉りて、ことなかりけり。

平穩無事だった

『十訓抄』より

注1 白河院 …… 平安時代の天皇で、一〇八六年讓位し上皇となつて院政を始め、実権を握つた。

2 九重の塔 …… 今の京都市にあった法勝寺の八角九重塔。白河院の発願で建てられ、八十メートル以上の高さがあったが、たびたび

びの自然災害で破損した。

3 定綱朝臣 …… 藤原定綱。平安時代後期の廷臣。

4 韋中將 …… 中国の魏の人。帝がつくつた凌雲殿の額を書くために高所に吊り上げられ、戻ってきたときには白髪になっていた。

5 顕隆卿 …… 藤原顕隆。平安時代の公卿で、白河院の近臣だった。

問一 波線部A「承りて」、B「ほめられける」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 白河院 イ 定綱朝臣 ウ 仏師にながし エ 顕隆卿

問二 傍線部①「黒白」とあるが、本文中でこれと同じ意味を表している語句を抜き出しなさい。

問三 傍線部②「かく」とあるが、その内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仰せに従って塔に上ったものの、途中で帰ってきてしまい、申し訳ない、ということ。
イ 高い塔に上ってはいたが、あまりの高さにすっかり恐ろしくなった、ということ。
ウ 高い塔に上ってはみたが、事の真偽を判断することができず、残念だ、ということ。
エ 仰せを受けて塔に上っても任務は果たせず、処罰されそうで恐ろしい、ということ。

問四 傍線部③「いみじきをこのためにいひけるを」を現代仮名遣いに直しなさい。

問五 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 定綱朝臣は、塔の修理の件で罪に問われそうだと聞き知ったので、仏師にやり直すよう命じたが、仏師は塔に上り切れなかった。
イ 九重の塔の金物が牛の皮で作ってあるというわさが流れたため、修理をした仏師は処罰をされるのではないかと恐れて震えた。
ウ 白河院は、仏師に金物が牛の皮でできているかどうか見させようとしたが、仏師が役目を果たせなくてもとがめることはなかった。
エ 仏師が塔の上まで上れずに下りてきた後、顕隆卿は、仏師が定綱朝臣をかばっていることを見抜き、その悪知恵にあきれかえった。